昭和二十六年

父還暦につき今年より吾家長となる

歳棚に今年家長の灯を献ず

読み＝としだなに　ことしかちょうの　ひをけんず

季語＝歳棚（新年）

歳棚は正月を迎えるためだけの神棚。白木の板を天井から荒縄で吊り、注連縄で囲って神域とする。飾るのは松ぼっくりが着いた松の枝と、縄付きのころ柿、暮れの頂き物一切合財、従って新巻鮭が一匹まるまるぶら下がる事もあった。近所の子供と交換した書き初めも貼った。

さらに二十八日と決まっていた餅搗きで搗いた餅、お座り＝供え餅も元旦まで歳棚に預けた。

歳棚に灯明を上げた家長は、預けてあったお座りを、屋敷内に散在するいろいろな神様に上げて回る。最後は屋敷森の中の屋敷神である。

昭和二十六年正月。この後、家の改装と共に撤去された塀地門の前に手。

榮助の隣は男衆のよっちゃん。女の子は邦子さん、姉の敏子さんと共に良知の子守をしてくれた。

古里の林泉（シマ）の初日に漱ぐ

読み＝ふるさとの　しまのはつひに　くちすすぐ

季語＝初日（新年）

林泉は、庭園の池にに築いた人工の島のこと。

榮助の生家、落合村塚原の深澤家の屋敷には自然の川が流れていた。北西の角から入って来た川は、台所脇で小さな池となり、ここで洗い物をするようになっていた。川は更に屋敷の西からぐるっと回って南側に出、大きな鯉が泳ぐ庭の端の鑑賞用の池に流れ込んだ。池の庭の反対側は島に見立てられない事も無い築山になっていて、大きな紅葉の木があった。

榮助が正月に生家に帰るという事は無いであろうから、まして今年家長なのに正月に里帰りする訳もないので、これは追想であろう。俳句は全て現実で写生でなければならないと言う事はない。

、

新府城めぐる霜林囮鳴く

読み＝しんぷじょう　めぐるそうりん　おとりなく
季語＝霜（冬）

南側から見た新府城。一九七二年頃の撮影で、まだ桑畑が現役である。

新府城は織田徳川軍の甲斐国侵略ルートと予想される諏訪口に向けて、武田勝頼公の命により、作事奉行真田昌幸の径始差配、一年の工期で天正九年に完成した大規模な要塞である。しかし、翌天正十年三月の織田徳川の侵略軍を前にして、要塞兵不足から守りきれない事が明白となり、戦闘に使われる事無く味方に火を放たれ、放棄された。

新府城を放棄した勝頼公一行は、三月十一日笹子峠の北、天目山に消え去る。

榮助には囮を使って小鳥を獲る趣味は無かったので、これは誰かの技を見物しているのであろう

南中の日を梢（ウレ）にして落葉掃く

読み＝なんちゅうの　ひをうれにして　おちばはく
季語＝落葉（冬）

この落ち葉掃きは、庭の掃除をしているのはなく、椚や赤松の林でその落葉を掃いているのだと思われる。掃いた落ち葉は堆肥にしたり、松葉の比率が高い物は、竈の焚きつけにした。

梨大付属小K君来庵

《K君とは、山梨師範の同級だった橘田正光先生。美術の先生で、榮助の家とその周辺の古い時代をそのまま残している風景をこよなく愛し、何度も写生に訪れた。『大火焚き産声を待つ五月の爐』の囲炉裏の絵を描いた橘田画伯である。
この絵『新涼』は、県の展覧会に出展された際、いま時（昭和二十五年頃）こんな囲炉裏がある家があるのかと話題になったという。》

冬凪や画紙がましろく日をはじく

読み＝ふゆなぎや　がしがましろく　ひをはじく
季語＝冬凪（冬）

榮助は自分でも水彩画を描いたので、イーゼルや画板も持っていた。実際にそのイーゼルを立てて絵を描いている姿は見た記憶が無い。

雪嶺を描く冬帽をまぶかにす

読み＝ゆきみねを　かくふゆぼうを　まぶかにす
季語＝冬帽（冬）

東山＝茅が岳の中腹の村、穂坂から見た西山＝鳳凰三山と甲斐駒ヶ岳。

一番手前の枯れ草は近景であるが、低くなって景色の色が変わっている辺りが藤井田圃。その上、画面を横切って黒く見える帯状の森は七里ヶ岩の東縁斜面。その左端付近森がこんもり大きくなっている辺りが坂井。榮助のホームグラウンドである。橘田画伯は坂井のどこかからこの西山を描いているのであろう

七里ヶ岩と西山の間には釜無川が流れているがそれは当然見えない。暗いうちに起きて栗拾いに行ったのは西山の麓辺りであろう。

夜になると七里ヶ岩東縁から台上に向かって走る汽車の灯りが見える。銀河鉄道として一部マニアに人気があるらしい。

我ツルゲーネフを愛読す

読みさしの「獵人日記」春を待つ

読み＝よみさしの　「りょうじんにっき」　はるをまつ

季語＝春待つ＝待春（冬）

ツルゲーネフの「獵人日記」は二葉亭四迷の名訳がある短編集。ロシアの農奴の生活を描き、ロシア革命の遠因の一つにもなったと言われる。ロシアの農奴に自分の貧を重ねているのかもしれない。

榮助は後にソルジェニーツィンの「イワン・デニーソビッチの一日」を読んで、流石はノーベル文学賞、といたく感激していた。

この頃より難聴特別ひどくなる

聾々の一人はやすし野を焼ける

読み＝ろうろうの　ひとりはやすし　のをやける

季語＝野を焼く（春）

榮助の言葉によれば「鼻先の電話が鳴っているのも聞こえない」のだそうであった。母茂よじもやや耳が遠かったが、榮助の兄忠良は格別遠くはなかったし、次の世代の、兄も私も従兄姉妹達も耳が遠いと言う事は無いので、遺伝性という訳でもなく、原因は不明であった。

父は、息子たちに遺伝しないかとかなり心配だったらしい。

豊頬をつゝみてあます冬帽子

読み＝ほうきょうを　つつみてあます　ふゆぼうし

季語＝冬帽子（冬）

この句はどうしても

『労咳の頬美しや冬帽子／龍之介』
を連想させる。

さらに、この龍之介の句は「グロテスクな諧謔」と言われた。

『死病得て爪美しき火桶かな／蛇笏』
を下敷きにしている事は有名である。芥川は、これを「句境の剽窃」と言っている。

『山国の虚空日わたる冬至かな／蛇笏』
という有名な句がある。黙栄がこの句から

『国原は満天の星節分会／黙栄』
を詠んだ。昭和二十三年か二十四年の作で、蛇笏の、『山国の…』、の句境を剽窃した句であるということは、黙栄当人から聞いた。素晴らしい句であると思うのだが、黙栄はこの句を『槻蔭』に入れなかった。

信州　渋の湯

灯をつらね温泉の坂道風花す

読み＝ひをつらね　おんせんのさか　はざばなす
季語＝風花（冬）

渋温泉は長野県の北部の温泉。私も会社の社員旅行で一度行った事があるが、あまり深い記憶が無い。かなり熱い湯であったように思う。
黙栄の句によると、坂道になっている温泉街のようである。北信州の事、何時でも風花が舞っているのであろう。
信玄公の隠し湯の一つで、川中島での負傷兵を収容したと伝えられる。川中島には遠くないので、この話には信ぴょう性がある。また小林一茶のゆかりの地でもある。

暖雨止む裾濃（スソゴ）の富士を簷（ノキ）近く

読み＝だんうやむ　すそごのふじを　のきちかく
季語＝暖雨（春）

暖雨は暖かい雨で、春の雨のこと。簷は、軒で家のひさしのこと。裾濃は同色系で下が濃く上に行くに従って淡くなる染物のことで、富士山の色の具合を言っている。と、難解語を解説をしただけで、句の正体が判ってしまう。
家から見える富士山を詠んだのか、あるいは富士山の近くに旅しての句なのか、一寸判りかねる。
黙栄自身を主語（ただし省略）にして、富士を簷近く、と侍らせ眺めている表現が、富士は簷近く、と富士山を主語として勝手な存在にしていないところが俳句的で良い。

班雪嶺（ハダラネ）のそそる濃藍鳶めぐる

読み＝はだらねの　そそるのうらん　とびめぐる
季語＝斑雪（春）

斑雪嶺は雪が解け残って斑になった峰、そそるはそそり立つ、濃藍は濃い藍色であるから、空の色。この句も、難しい言葉を現代語に訳すと、なんだ見たまんまじゃん、という句である。
しかし、難しい言葉の威力か、早春の気持ち良く晴れた日の情景描写として素晴らしい。

日は午の卒業の門乾風(ナライ)吹く

読み＝ひはひるの　そつぎょうのもん　ならいふく

季語＝卒業（春）

元教員榮助は、卒業式が気になったらしい。卒業の句が数句ある。春とはいえ、晴れて北風が吹くのは冬型の気圧配置で、寒い卒業式である。

ならいは、北風のこと。本来、海辺の地方の言葉で、甲州の言葉ではない。黙栄の句にはこういう甲州の言葉、習慣ではない事が詠まれる事がある。

落語の『船徳』に、船頭になりたいという若旦那を古参の船頭が「沖い出て、ならいでもくらってごらんなさい」と脅かすシーンがある。江戸湾で北風を喰ったら、どんどん沖に押し出されてしまうので洒落にならない。

棕梠花を垂りて季節の東南風(タツミ)吹く

読み＝しゅろばなを　たりてきせつの　たつみふく

季語＝棕梠花（春）

この句ではたつみの風が吹いている。巽は黙榮の句の通り東南の方向のこと。

現代の方位では南東であるが、昔の日本では東西を先に言った。それ故、日本列島の南西部で起きた戦争（内乱）は西南戦争と呼ばれている。

南東の風は、台風の代表的な風であるが、ここでの季節の風は勿論台風ではない。甲州では、日本海から北日本に低気圧があると東南の風が吹く、低気圧が発達すると暴風になる事もある。

日本海に低気圧が発生するのは季節を問わないが、立春頃から春分にかけて現れ発達すると暖かい南東の風を引き込み、関東地方は気温が上がる。これが春一番である。この句の季節の風も春一番か、その近辺の暖かい南風であろう。

花を付ける棕梠は榮助の家には無かったが、坂井遺跡保存庫脇に大きな棕梠が数本あった。

静岡県の裾野に家を買った時、ゆりが苗と言ってもいい位の小さな棕梠を呉れた。あれから三十年経っても高さ一メートルにも満たないが元気である。

胸乳(ムナヂ)揺り朝の縄とび夏時間

読み＝むなぢゆり　あさのなわとび　なつじかん

季語＝夏時間（夏）

一寸謎の句である。ゆりが縄跳びをしたのであろうか。ゆりは小柄であったが、今で言う巨乳であったから縄跳びをしたら盛大に揺れたであろう。

夏時間になると、標準時間の朝より一時間遅くなるので、同じ時刻なら暑い筈である。

昭和二十六年は日本に於ける夏時間の最後の年であった。

ほたるとび貧しき夕餉匂はする

読み＝ほたるとび　まずしきゆうげ　にほわする

季語＝ほたる（夏）

この頃には、下道（したみち）との間の小さな水路にも螢が飛んだ。

炊事係は祖母のはつであった。榮助は後に「婆さんは料理が下手だった。不味かった」と述懐した事がある。榮助にとって料理の全ては生母の茂よじのお袋の味であった。はつの料理の腕は兎も角、冷蔵庫も無い時代の山村の食事が豪華である筈がなく、昭和三十年代にになっても毎日（毎食ではない）肉か魚が食卓に登ると言う事は無かった。ましてや栄養失調死が真剣に心配されたこの時代、一体何を喰っていたのか、想像を絶する。

晩年の榮助が料理の名人であったと懐かしんだ生母の茂よじ。
料理の腕の本当のところは不明であるが、甲州の女性らしい世話焼きのしゃきしゃきのお婆さんだった。いつも小奇麗にしていて、朝、お蔵の尾垂れで長い時間をかけて髪を整え、身繕いをしていた。

ほたる篭のぞくかぼそきうなじのべ

読み＝ほたるかご　のぞくかぼそき　うなじのべ
季語＝ほたる篭（夏）

うなじの持ち主は、若い娘ではなく、我が子泰元であろう。当時螢は藤井田圃まで行けば、農業用水路や黒沢にいくらでも飛んでいたし、家の近くに巾一尺あまりの水路にもいた。

花柿のそよぐ天蓋山雨来る

読み＝はながきの　そよぐてんがい　さんうくる
季語＝花柿（夏）

豪華な句である。柿の花の天蓋への見立てが素晴らしい。青空を透かして瑞々しい柿青葉と淡いクリーム色の柿の花が風にそよいでいる。
山雨は、山から来る雨、山から降り始める雨。雨はたいてい直線で十キロ余りの西山から来る。

児等が去る西日にかわく甘茶佛

読み＝こらがさる　にしびにかわく　あまちゃぶつ
季語＝甘茶佛（春）

四月八日には延命寺の庭に甘茶佛を祀り、子供達に甘茶を配った。子供達はサイダーの空瓶などを持ってお寺に集まった。中には一升瓶を持ってくる子もいた。アマチャヅルはガクアジサイの仲間で、伊豆などには自生し、土産物屋で売っている。甘茶はこのガクアジサイを煎じたお茶で、ほの甘く、口の中に後味が残る独特の飲み物であるが、美味しいというものではない。
配られる甘茶はお代わり自由であるが、当時の子供にとってもそれほど魅力的な物ではなく、壜に貰ったらさっさと散って行ったと思われる。

水冷えて蜘蛛は夕べの圍にのぼる

読み＝みずひえて　くもはゆうべの　いにのぼる
季語＝蜘蛛（夏）

空気が冷える、冷ゆ、は秋の季語であるが、ここでは水が冷たく感ずるという冷ゆなので夏の夕方、日向水状態からようやく水らしく冷たく感じられるようになった、という意味である。その状態が蜘蛛が巣を作る事と

は直接関係はない。園は囲に同じであるが、園にも囲にも、四角でなくても直線状の垣根、塀という意味もある。

和金魚飼い少年貧をすこやかに

読み＝わきんかい　しょうねんひんを　すこやかに

季語＝金魚（夏）

和金魚は貧乏人の金魚か、という疑問はあるが、「琉金飼い」「蘭ちゅう飼い」ではまずいだろうと思う。丈夫で安価な和金魚は大きな池などで飼うと非常に大きくなる。鮒か緋鯉かと思うが、尾びれが三つに分かれていて、あ、こいつは金魚だとびっくりする。

深梅雨のひまの黎明月巨き

読み＝ふかつゆの　ひまのれいめい　つきおおき

季語＝梅雨（夏）

梅雨前線が停滞し、びたびたと続く梅雨もふと止んで晴れ間が見える事もある。晴れ間の月が山の端に意外に大きく見えるとも、この前見えた月よりも丸くなっているともとれる。

虹美し生活の鍬を立てゝ妻

読み＝にじうつくし　たつきのくわを　たててつま

季語＝虹（夏）

榮助もゆりも戦後の百姓である。自分で鍬を握るようになって六年、もうかなり板に付いたであろう。しかし、ゆりは生涯所謂「左鍬＝ひだりっくわ」が苦手で、利き手方向（野球のバッターと同じ手の並び＝右利きなら左手方向に進む）と逆手方向では畝を切る速度も出来も違っていた。

私は意外にも器用に左鍬を使え、ゆりに「うまいじゃん」と誉められたことがある。

林芙美子急逝

昭和二十六年六月二十八日人気絶頂の流行作家として書きまくっている時急死四十七歳、死因は心臓麻痺、今で言う過労死か。

未咲きの葵を供華に芙美子の忌

読み＝うらさきの　あおいをくげに　ふみこのき

季語＝葵（夏）

未は、うらなりのうらで、枝の先の方に生ったあるいは咲いた、一寸弱弱しい実ないし花のこと。

六月末なら、葵も銭葵も盛りの頃で、庭先にも畑の隅にも一杯咲いていたであろうに、なぜ未咲きの葵だったのか。

揚羽来て凌霄（ノーゼン）風に揺れやすく

読み＝あげはきて　のーぜんかぜに　ゆれやすく

季語＝揚羽（夏）、のうぜん（夏）

のうぜん蔓は、蒸し暑さに合う花である。榮助の屋敷にも両隣にも不思議にのうぜん蔓は無かったので、ちょっと珍しい花として見ているのであろう。反対に、今住んでいる横浜市港北区では、散在する古い農家には必ずと言っていいくらいのうぜん蔓がある。

この句は、季重ねで、しかも句の構成は季語+動詞を二セット並べだけであり、良句とは言えない。

灯篭に土の香高き雨少し

読み＝とうろうに　つちのかたかき　あめすこし

季語＝灯篭（秋）

庭に風流な灯篭などなかったので、この灯篭は盆灯篭の事であろう。庭は蓆を敷いて麦や籾を干す為に平らかつ、麦や米に混入しないよう一個の小石（砂粒）も無いように管理されていた。

従って、乾いた所に雨が降ると降り始めは埃が立って土の匂いがした。今でも何かのはずみで雨の降り始めに埃っぽい匂いを嗅ぐとあの庭を思い出す。

次の句は前書きに五月とあることから八句前の甘茶佛の句の後に辺りに入るべきである、しかし、そもそもこの句集の句の順序は各年とも必ずしも季節順となっていない。例えば、昭和二十六年には、甘茶佛の前に柿の花が咲き、さらにその前に螢が飛んだりしている。原稿は万年筆手書であるため、あっと思っても訂正しきれなかったのであろう。

この年五月峡北雲母支社結成（蛇笏先生の来臨をうる）

蛇笏は大家なのにこうした招き（依頼）には快く応ずる人だったという。ただ、招いた方はそうはいかない。蛇笏選に入れれば、孫子の代までの自慢話になりうる大変な事なので、後でそれを巡って俳句仲間にひびが入るというような事もあったらしい。

花桐の月のやすらい色深く

読み＝はなぎりの　つきのやすらい　いろふかく

季語＝花桐（夏）

花桐が好きであったのか、この句集に花桐の句が三句あるが、この句は月下の花桐を詠んでいる。前書きからして蛇笏師に抜いて貰った句であると思われる。

黙榮にしては色っぽい句である。

炎天へ洋傘(カサ)をパチリと債鬼去る

読み＝えんてんへ　かさをぱちりと　さいきさる

季語＝炎天（夏）

こんなに借金をしなければ暮して行けなかったのかと驚きであるが、傍証を集めるとこれは「ほらふき榮助」の俳句であるらしい。確かに一時の資金繰りで借金をしたかもしれないけれども、債鬼というような人が直々に取り立てに来るような借金の仕方はしなかったというのが真相らしい。借金はプロの金貸しではなく、気の置けない筋の親戚などに拠ったらしい。

それに、炎天という季節の頃は、最大の現金収入源であった春蚕の繭代金が入って間もない頃である。

子等病めば

帰燕鳴き手盛食う飯やもめゝく

読み＝きえんなき　てもりくうめし　やもめめく

季語＝帰燕（秋）

蛇笏にも子供が病気で、一人で飯を食っているという句がある。

『南風(はえ)つよし子の病難に飯(いい)を噛む／蛇笏』

「聞けわだつみの声」

流燈すわだつみの声高まり来

読み＝りゅうとうす　わだつみのこえ　たかまりき

季語＝流燈、灯篭流し（秋）

盆の行事に灯篭流しがあったのかどうか記憶にない。少なくとも私の記憶が定まる昭和三十年頃には既に灯篭流しはしなかった。

「聞けわだつみの声」は榮助の書棚にあった。

榮助はわだつみ世代より十歳以上年上であるが、学業半ばで戦場に散った若者への共感があったのか。

戦争末期は榮助と同世代も、現役のまま、あるいは再度、再々度の招集でジャワ・ボルネオ・スマトラはじめ南の島に展開して行った。海のはるか南から還らぬ友人知人も多かったであろう。

長男、三男ともに重病三句

この夏、村に赤痢が流行った。赤痢は排泄物経由で経口伝染する不潔の極みの流行り病であるが、それが当時の農村のレベルであったのであろう。

子供達の主治医、退役海軍軍医中将向山美弘閣下は、クロロマイセチンを処方した。親戚の人がこの処方箋を持ってクロロマイセチンを求めて東京に蜻蛉返りした。その効力鬼神の如く。子供達は命を取り留めた。

炎天へ不吉の思念ふりとばす

読み＝えんてんへ　ふきつのしねん　ふりとばす

季語＝炎天（夏）

月澄めり汝(ナレ)父人事盡くせるや

読み＝つきすめり　されちちじんじ　つくせるや

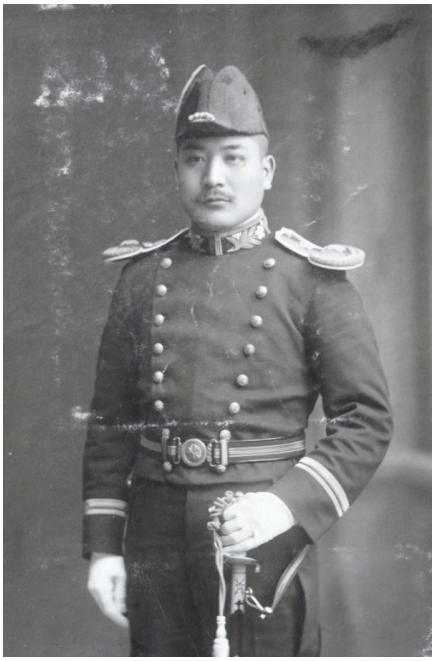
季語＝月（秋）

蜩を去る死魔の跫音夜が白む

読み＝かやをさる　しまのあしおと　よがしらむ

季語＝蜩（夏）

蜩とは見た事も無い字であるが、歳時記にはちゃんと載っているので、黙榮にとっては、蚊帳より馴染みの字だったのかもしれない。クロロマイセチンが効いて、いわゆる峠を越えたと言う状態であろう。



向山閣下。
袖章からごくお若い中尉時代の写真。
この頃の閣下には巡洋戦艦『金剛』乗組というような経歴もある。

向山先生には、この後、昭和二十八年夏に大病した時も往診して診て頂いた。先生は昭和三十年七月に亡くなったので、私はこの命の恩人をぼんやりとしか覚えていない。好平は閣下と呼んでいたが、榮助、ゆりは先生と呼んでいた。ゆりの話だと私は向山先生が嫌いで（というか怖がって）声がしただけで顔色を変えて逃げまどい、「そんなに嫌われてはかなわない」と先生を苦笑させたという。

秋の繭朝夕霧にうるほえり

読み＝あきのまゆ　あさゆうきりに　うるほえり

季語＝秋の繭（秋）

盆燈篭無縁の墓のうら照らす

読み＝ぼんどうろう　みえんのはかの　うらてらす

季語＝盆燈篭（秋）

うら＝末、あるいは枝等のさきっぽ。甲州方言では一寸細長い物の先の方もうらと言った。「うらっぽ」「うらのほうに」というように使う。

土は冷え天はやすらか大根蒔く

読み＝つちはひえ　てんはやすらか　だいこまく

季語＝大根蒔く

大根は、秋一寸涼しくなったかな、と思う頃蒔き、晩秋に収穫する、秋蒔き野菜の代表格である。

繭をえるひくき秋灯ぬくみあり

読み＝まゆえる　ひくきあきひ　ぬくみあり

季語＝秋灯（秋）

繭の出荷準備風景である。簇（もず）から外した繭は、繭の周りの毛羽を毛羽取り機（最初手動、後に足踏み、さらに電動になった）で取り、ころころとした繭にする。中で健康な蛹になっていない繭（プロには判る）、汚れた繭、大繭といって二匹の蚕が共同でつくってしまった大きな繭、などは別扱いとなるので毛羽取りをしながら取り除く。

繭の取引は慣習的に朝と決まっていたので、翌日出荷分は夜なべ仕事で準備する。明かりは四十ワット位の裸電球で、手許を明るくするためにコードを下げて低くしてある。

墓燈篭光をかたみに更けいたり

読み＝はかとうろう　ひかりをかたみに　ふけいたり
季語＝燈篭（秋）
かたみ＝名残　思いで

山霧のおりいてあそぶ月供かな

読み＝やまぎりの　おりいてあそぶ　げつぐかな
季語＝月供（秋）
黙榮独自（？）の季語、『月供』の句である。

稲架に月田の神おくる餅をつく

読み＝はさにつき　たのかみおくる　もちをつく
季語＝稲架（秋）
稲を刈り稲架に架け終わり、今年の収穫は事実上終り、田の神様に感謝の餅をついている。餅はハレの食べ物で、普段は餅を搗いて食べたりはしない。
田んぼでの作業での田の神（お田の神さん）は身近な存在で、田んぼで小便するにあたっては、お田の神さんに「どいとくれ」と断ったし、作業が半分を過ぎると後はお田の神さんが手伝ってくれると頑張った。
田の神は山に住むが、田との往復には家を介するので、田の神への供物は家の中の神棚に上げる。

麦種子をおとしつついつか月夜なる

読み＝むぎたねを　おとしついつか　つきよなる
季語＝麦蒔き（秋）
麦蒔きの季節の日は短い。午後四時前、早々と西山に日が沈むと、あっという間に暗くなってしまう。

山棲みの狭き星座も冬に入る

読み＝やまずみの　せまきせいざも　ふゆにいる
季語＝冬に入る＝立冬（冬）
山国の空は狭いが星がきれいである。夏は月さえなければ、天の川が視認できる。天の川が天辺に来て、織姫／彦星や蠍座さらに白鳥座がある夏に比べると、秋は星座が淋しい季節である。冬の豪華な星座が現れると、季節が回ったという感慨が湧く。
黙榮は天体観測に趣味は無かったが、オリオンや南の空に輝くシリウスは判ったであろう。清少納言にちなんで、昴も知っていたかもしれない。
こうした星空も、村の南（空が一番開けている方向）にＴＥＬ社の大工場が出来、夜も日も無い照明で今は昔である。

昭和二十六年　終り